



TITLE:

<近況報告>音楽活動について

AUTHOR(S):

原, 摩利彦

CITATION:

原, 摩利彦. <近況報告>音楽活動について. 京都大学生涯教育フィールド研究 2013, 1: 97-100

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/174234>

RIGHT:

【近況報告】

音楽活動について

原 摩利彦

My recent musical activities

HARA, Marihiko

1. はじめに

みなさま、ご無沙汰しております。生涯教育学講座 M1 で、ただいま休学をしています原 摩利彦¹です。学部時代から学外で音楽活動をしてきました。今回はこのような機会をいただきましたので、活動内容について、去年を振り返りながら書かせていただきます。

私は、コンピュータやピアノを使って作曲し、CD をリリースしたり、舞台や映画、CM 等のために音楽を作ったりしています。ピアノの静かな曲や激しい電子音楽も作りますし、ときには十七絃箏の曲も作曲します。

自分が創作に関して最も大事にしていることは、「音を聴くこと」です。ここでの音を聴くということは、作曲過程での実際面でのことと、日常のあらゆる場面との両方を示しています。(学部の卒業論文では「音を聴くこと」から得られるものについて論じました。)

現在では、作っている音をスピーカーやヘッドフォンで確かめながら作曲をしていくというスタイルが主流であります。(私の友人であり先輩であるベルギーの音楽家、シルヴァン・ショボー²は「音を聴くことはもはや伝統だ」とも言いました。)ですので、音を聴くことが重要であるというのは自明のことでもありますが、それでもなお常に意識しておかなければならないことです。音楽家は基本的には音を出す側ではありますが、音を聴く側の耳を常に持っていないとよい音は作れません。秋の夜に、虫の声など自然の音に耳を傾けると、それまで思っていた以上にたくさんの音が鳴っており、それぞれの音に迫力があり、そして音の聴こえてくる方向や音の移動なども様々であることに気づきます。そこから作曲のヒントを見いだしたり、インスピレーションを受けたりすることはよくあります。

2. 活動内容

1) コンサート — 音を聴くこと、音を出すこと

昨年、音を聴くということを改めて考え直す機会がありました。

2012 年 5 月に山口県の山口情報芸術センター(YCAM)というところで、サウンドアーティストの鈴木昭男さんと evala さんとの三人で演奏する機会に恵まれました。鈴木さんはサウンドアートの第一人者であり、長年音を聴くことについて思索を深められ、実践されてきた方です。コンサートでは石をこすりあわせたり、自作の楽器を使って空間に音を生み出します。evala さんは自然の音を素材にコンピュータによって非常に繊細で美しい音

を作られる方で、鈴木さんが出された音をコンピュータによってリアルタイムに加工をされました。お二方も非常によい耳を持っています。私はコンピュータとカセットテープを持参し、いろいろな音を用意してリハーサルに臨みました。

リハーサルがはじまり、集中して音を聴いていると全く自分が音を出せなくなりました。もちろんボタン一つの操作で物理的に音を出すことは可能です。しかし、その音の出し方が適切なのかどうかを判断するのがとても難しく、ほとんど音を出せないまま、ただ共演者の二人の音を聴くだけで最初のリハーサルを終えてしまいました。音を出せないというのは初めての経験でした。

幸い2日間のリハーサルを経て、また先輩たちのアドバイスもあり、本番は無事終わることが出来ました。音を聴き、そして音を出すということが如何に難しいかということをも身をもって感じました。

その後、なぜあの時に音を出せなかったのかということはずっと考えていましたが、音を聴くことと音を出すこと、この二つを分離して捉えていたのではないかと今は思っています。少なくとも演奏に関しては、音を聴くことと音を出すことは連続していなければなりません。

音を聴き、そして音を出すこと。この根本的な問題をもう一度考えながら、6月に京都の法然院で行われたコンサートに臨みました。法然院の方丈という庭園のそばにある建物です。とても静かな空間ですが、耳を澄ますと鳥や蛙の鳴き声、風の音、人々の息や畳に衣服がこすれる音、そしてししおどしの音など多彩な音が動いていることに気づきました。それら自然の音を背景音として自分が用意した音を出すのではなく、自然の音の中にとけ込むような音を目指しました³。

2) 舞台音楽 — ダムタイプ高谷史郎氏のプロジェクトへの参加

舞台音楽では、舞踊家のボヴェ太郎⁴さんの世田谷美術館での公演、京都で滞在制作をしていたフィリピンのダンサーの町家での公演の音楽を手がけましたが、ダムタイプ⁵高谷史郎⁶さんのプロジェクトに関わったのが最近の大きな出来事です。ダムタイプとは、1984年に京都市立芸術大学の学生を中心に結成され、『S/N』、『OR』、『memorandum』、『Voyage』などの先進的なパフォーマンス作品を世界中で上演し、評価を得てきたアーティスト集団です。高谷史郎さんはその中心的メンバーであり、映像作家としても知られています。私が高谷さんの作品に一番最初に出会ったのは、1999年に東京と大阪で上演された坂本龍一オペラ『LIFE⁷』のときです。

昨年は、2008年にドイツにて制作された『明るい部屋⁸』の再演(新国立劇場、東京)と、新作『CHROMA⁹』(びわ湖ホール、滋賀)の制作と上演を行いました。『CHROMA』はびわ湖ホールにて滞在制作、そして初演を行った高谷史郎演出パフォーマンス作品第二作目で、身体、映像、照明、音などが総合的に組み合わせられた舞台です。

ダムタイプの作品の作り方は各分野のメンバーが集まって話し合いを重ね、出来るだけ時間を過ごし、各自の持つ問題意識や興味などを共有し、進めていきます。私は古代ギリシャの音階に興味があったので、それを調べ、メンバーにプレゼンをしました。

音楽はデレク＝ジャーマン監督の映画『BLUE¹⁰』の音楽担当のサイモン・フィッシャー・ターナー¹¹が中心となり、私も作曲しました。1月に約2週間、そして8月中旬から9

月の初演までの約 1 カ月の滞在制作を経て初演を迎えました。サイモンは夏の滞在制作には来日できなかったのも、彼と連絡を密に取り、編集と作曲をしていきました。

喝采のうちに初演を終え、今年から海外での上演がはじまります。

3) その他 — 映画音楽、インスタレーション、ユニット活動

伊勢谷友介さん監督映画『セイジ -陸の魚』のサウンドトラックに参加することができました。音楽監督のもとに何人かの音楽家が集まって作曲するというもので、私は 2 曲のオリジナル、2 曲コラボレーションをしました。

また映像作家ユニット・カワイオカムラさんの短編映画『COLUMBOS¹²』の音楽を全編担当しました。この作品は、スイスのロカルノ国際映画祭に正式招待され、プレミア上映。その後もロンドン国際アニメーション映画祭やロッテルダム国際映画祭などの主要な映画祭にて上映され続けています。

佐川美術館で展示されているインスタレーション¹³『吉左衛門 X 暗闇の音 静寂の光 高谷史郎・音/映像 + 楽吉左衛門・茶碗』にも参加しました。

この展覧会は、楽焼の第 15 代楽吉左衛門さんと高谷さんがコラボレーションをするという企画です。楽氏の茶碗に映像を投影したり、茶事の音(着物が畳にこすれる音、茶筌の音など)や、楽氏が窯で茶碗を焼く際の音、佐川美術館にある水の音を録音したものを再生して会場に流しています。

この音の部分の私は担当しましたが、薄暗い会場には 5 本の超指向性スピーカーが 1 列に並んでおり、それぞれが回転するように作られています。超指向性スピーカーとは音が真っすぐに飛ぶように設計されたもので、まるで耳元で音が鳴っているような効果を得ることができます。また音が壁に反射するの分りやすく、各スピーカーが回転するために、複雑に反射して音はあらゆる方向から飛んできます。5 つのスピーカーは、ある法則に従って、ランダムに録音された音を再生するようにコンピュータで制御されています。

その他、女性ボーカルとのユニット「rimacona(リマコナ)¹⁴」としても演奏活動をしており、昨年は京都嵯峨大覚寺で行われた「観月の夕べ」コンサート出演の他、5 年ぶりにニューカレドニアへと渡り、コンサートをしてきました¹⁵。

3. おわりに

以上のように、音楽のスタイルや目的、そして作品発表の媒体や形態なども異なった仕事に並行して関わることが多いのですが、どのプロジェクトもそれぞれ魅力的であり、とても刺激的なものです。そして音楽を作ることとは、音とだけ向き合うことではなく、多くの人と接し、その中で音と関わることであることを日々感じています。

これからも耳を澄まして自らの音を追究するとともに、もっとみなさんの耳に届くように努力していきたいと思っています。

注

- ¹ www.marikhohara.com
- ² ベルギー、ブリュッセル在住の音楽家 Sylvain Chauveau。ポストクラシカルというジャンルを確立し、映画音楽などを手がける。日本でも人気があり、これまでに数度来日している。
<http://www.sylvainchauveau.com/>
- ³ ライブ録音の抜粋。試聴可
→<https://soundcloud.com/marikhohara/marikhiko-hara-live-at-honen-in>
- ⁴ 京都在住の舞踊家。近年は能楽師との作品を発表。<http://tarobove.com/>
- ⁵ Dumb Type。 www.dumbtype.com
- ⁶ <http://shiro.dumbtype.com/>
- ⁷ 1999 年に行われた坂本龍一のオペラ。ピアノとオーケストラ、沖縄やモンゴルなどの民謡歌手、合唱団、ダンサー、映像など大規模なもので、映像監督を高谷史郎が担当した。
- ⁸ <http://shiro.dumbtype.com/works/lacc>
- ⁹ <http://shiro.dumbtype.com/works/chroma> 。 詳しい公演のレポート、そしてインタビューは、雑誌『Sound & Recordings 11月号』（リットーミュージック）に掲載されています。
- ¹⁰ Derek Jarman。イギリスの映画監督。エイズを患い、失明の恐怖におびえながら全編青色一色の映画『BLUE』を制作。1994年に死去。
- ¹¹ Simon Fisher Turner。イギリスの作曲家。幼少期よりテレビ番組に出演。その後、バンド「キング・オブ・ルクセンブルグ」を結成。現在では多くの映画音楽を手がける。
- ¹² YouTube にてトレーラーが視聴可→<http://youtu.be/TPpjR9JrWwU>
- ¹³ 空間全体を作品とする現代美術の手法。
- ¹⁴ ボーカル柳本奈都子とのユニット。 www.rimacona-lab.com
- ¹⁵ rimacona は、2006 年より写真作家津田睦美の展覧会『FEU NOS PERES ニューカレドニアの日系人』に関連して、ニューカレドニアと日本各地でコンサートを行った。ニューカレドニアには、主にニッケル炭鉱の労働者として多くの日本人が渡り、現在でも日系人が数多く住んでいる。詳しくは津田睦美氏のサイトを参照→www.mutsumitsuda.com/